

## 最近のパルミラ調査と新出土資料について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮下, 佐江子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/1575">http://hdl.handle.net/2297/1575</a>

# 最近のパルミラ調査と新出土資料について

宮下 佐江子

## 1. 奈良シリア・パルミラ遺跡学術調査団による1995年度の発掘調査

なら・シルクロード博覧会記念国際交流財団から派遣された、シリア・パルミラ遺跡の発掘調査も6年目をむかえた1995年には7月から9月半ばまで2カ月半にわたって東南墓地のF号墓でおこなわれた。1994年に大規模な宴会の場面を中心とする墓室彫刻が出土したので、今年度は当初の計画を変更して、入口付近の2つの側室を掘ることを主眼とした。その結果、8月末までに両側室を掘りあげ、西側室長さ5m、幅2.1m、東側室は長さ9m、幅2.1mであったことを確認した。これらは今までの調査では報告されたことのない未使用の状態であり、様々な興味深い知見を得ることができたが、詳細については正式な報告書の刊行を待つこととしたい(写真1)。

今年の調査のもう一つの目的は、昨年度出土した彫刻類の写真測量と美術史的考察であった。そのためにアジア航測(株)から3人の専門家を招聘し、彼らに同行して私も彫刻の精査のためにパルミラへ赴いた。

パルミラの墓室彫刻はいまだに不明な点の多いパルティア美術の一例として注目され、欧米の学者を中心に多方面にわたって分析、論証されているが、実際の発掘調査で原位置のまま出土した宴会図はここ数十年来なかったことだった。多くの最近出土の宴会場面の彫刻は、市壁やローマ以降の建物の基礎石として2次使用されたものであり、今回我々の得た資料のように建造当時に設置されたままの状態が発掘できたのは望外の幸運であったといえよう。主室に2つの横臥像、奥室に横臥像を中心にコの字形に12人の宴会場面の彫像が納められたこの墓には、サテュロスと思われる彫刻のほどこされた建立碑、長押の植物文様を中心とする装飾文様、そして譲渡碑文などもある。パルミラの発掘を始めてまだ経験の浅い我々ではあるが、1996年度に予定されている人類学調査の結果をも総合してパルミラ史について何らかの新しい成果を提起したいと考えている。

## 2. 最近の新出土資料について

我々の発掘したF号墓については先に述べたように正式な発掘報告書の刊行までは詳細な発表を差し控えるので、ここでは最近、パルミラの周辺で出土した大型石棺を紹介したい。これは1994年にパルミラの北北西(写真2)のグランド造成工事中に出土したもので、原位置からではないが、その図像は今までのパルミラ彫刻にみられない要素を含んでいて興味深い。現在、パルミラ博物館の1階に展示されているこの石棺は下の棺そのものだけで、上の蓋の部分はないが、一番の特徴は棺の四側面すべてに彫刻がほどこされていることである。この石棺の発見現場にごく近い所から、1991年にも大型石棺が出土した(写真3)。こちらは、博物館の屋外の入口に展示されている。これは通常の石棺と同じく、背面に彫刻はないが、蓋の部分の主人が横たわる彫像に、通常は妻と思われる女性の座像が据えられる左側に馬の像がある珍しい例である。室内に展示してある四側面の石棺は上部の縁が欠けており、彫像の顔の部分の損傷が激しいが、両者とも正面の香炉台(奉献台?)を中心

にした図像が殆ど等しいことから、同一墓、もしくは同時期の可能性が高い。大きさは、縦95cm、横226cm、高さ90cmであり、1991年出土のものもほぼ同様で、パルミラの石棺では大きな部類に入る。続いて、各側面の彫像を紹介しよう。

向かって右側面は2人の男性立像で、イラン系のズボンと縁飾りのある上着を着用しており、両腕を胸の前で組んでいる(写真4)。このポーズは今までパルミラにはみられないものである。また、両者が一方の肩をわずかにつきだし、脚の片方に重心をかけているように描出されていることから、従来のものにはなかった動的効果をあげている。

正面は前述したように香炉台を中心に7人の人物と一頭の牛が描出され、香炉台の向かって右側の人物はローマ風のトーガを身にまとい香炉台に手を差し延べていることから、主人であると思われる(写真5)。その他の6人はそれぞれチュニックのみを着用し、水差しや食物をのせた皿や鳥をささげもっているのが従者であろう。石棺にこのような集団の立像が表現されるのは、これまでパルミラ彫刻では数例しか知られておらず、奉納碑といわれる小彫刻や神殿のレリーフ以外で宗教的シーンが残された例もない。

左側面は2人の女性立像で、柄鏡をもった右側の女性が主人、小箱の蓋を開けている一方は従者であろう(写真6)。彫刻の技法においては特に目新しいものはないが、同一の場面はこれまでのところ出土してはいない。

背面(こちらが正面である可能性も強い)は香炉台を中心に6人の人物が描出され、両脇は従者らしき彫像、香炉台を挟む2人はトーガを着用した主人とそれに準じた人物であるのは、2人の間に神官の用いる円筒形の帽子があることからうかがえる。この2人の隣には貴婦人らしい女性立像が描出されている。この面は、顔の部分の損傷が少ない(写真7、8)。こうした何らかの宗教的シーンの図像はパルミラの宗教儀礼を考察する上で大変興味深いものがある。

この石棺の彫刻は、これまでのパルミラ彫刻にみられない動的表現やある種の物語性を含んでおり、屋外に展示してある石棺の図像とも比較検討していく必要があるだろう。

### 3. 東方ヘレニズム?とパルミラ彫刻

いわゆるヘレニズム時代は紀元前31年のアクティウムの海戦でクレオパトラとアントニウスのエジプト連合軍がローマに敗れて終焉をむかえたのだが、1-3世紀に最盛期を誇ったパルミラの彫刻にみられるギリシア・ローマ的な影響をヘレニズムからと言えるのだろうか。欧米では東方ヘレニズムという言葉は使われておらず、シリアがローマ属州となつてからのパルミラの美術表現についてはこれまでの観点から離れるべきではないだろうか。すなわち、明らかな西方の影響と土着的要素、そしてパルティアという東方の影響を詳細に分析していくなかで、パルミラ彫刻の性格を考察しなくてはならない。今回紹介した石棺の彫像は、従来のパルミラ彫刻とは異なった要素を多く含んでいる。こうした新しい資料を渉獵し、現地での調査結果をふまえて、この時期の美術を再考していきたいと考えている。

#### 参考文献

Jrean Starcky, Michel Gawlikowski *PALMYRE* (Paris, 1985)

Katsumi Tanabe *SCULPTURE OF PALMYRA I* (Tokyo, 1986)

Andreas Schmidt-Colinet *Palmyra-kulturbegegnung im Grenzbereich* (Frankfurt, 1995) Takayasu Higuchi, Takura Izumi *TOMB SA and C SOUTHEAST NECROPOLIS PALMYRA SYRIA* (Nara, 1996)

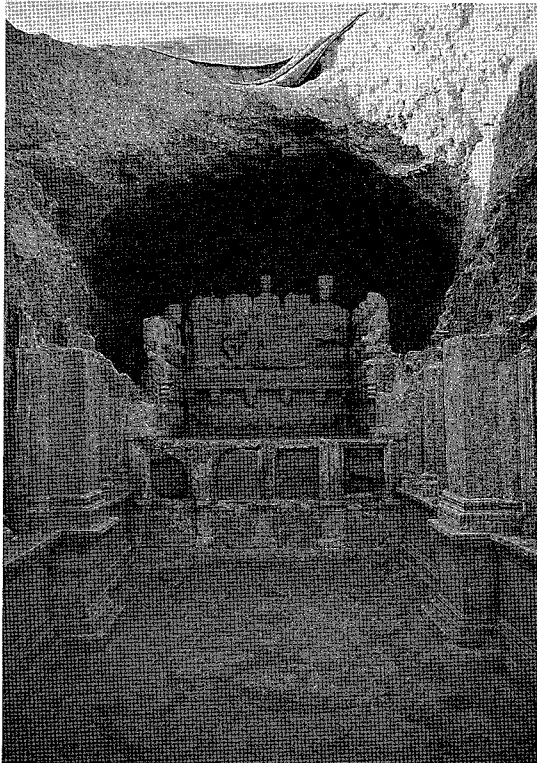


写真1 奈良シルクロード学研究センター  
によるF号墓の発掘

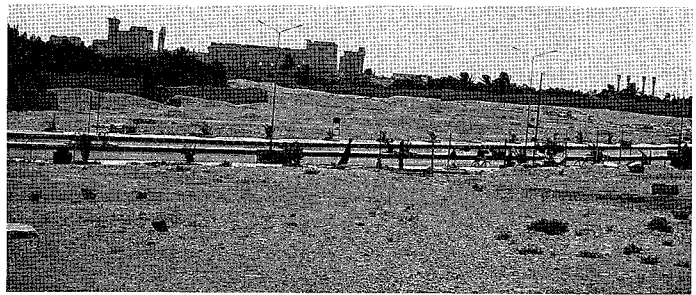


写真2 大型石棺の出土した地点

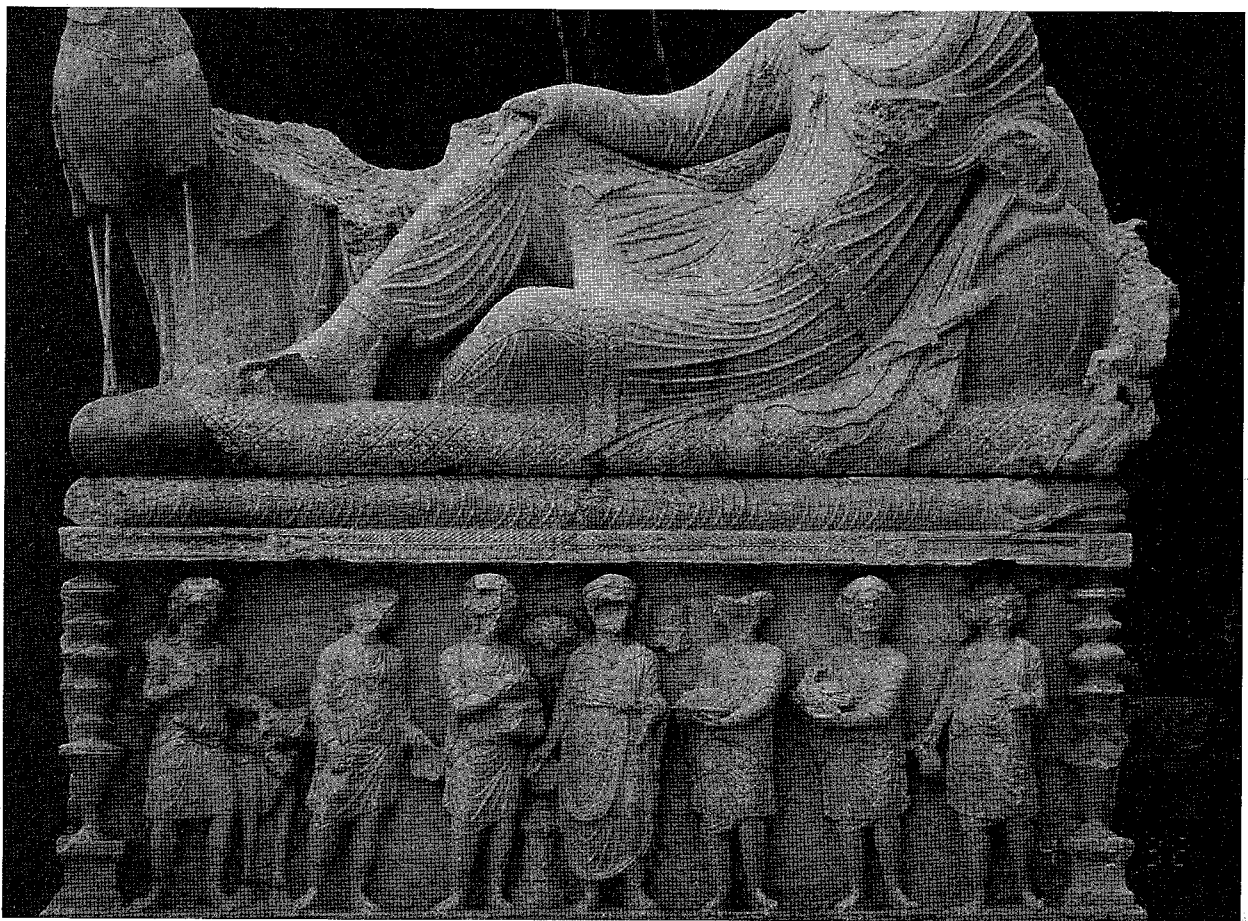


写真3 馬の彫像のある石棺

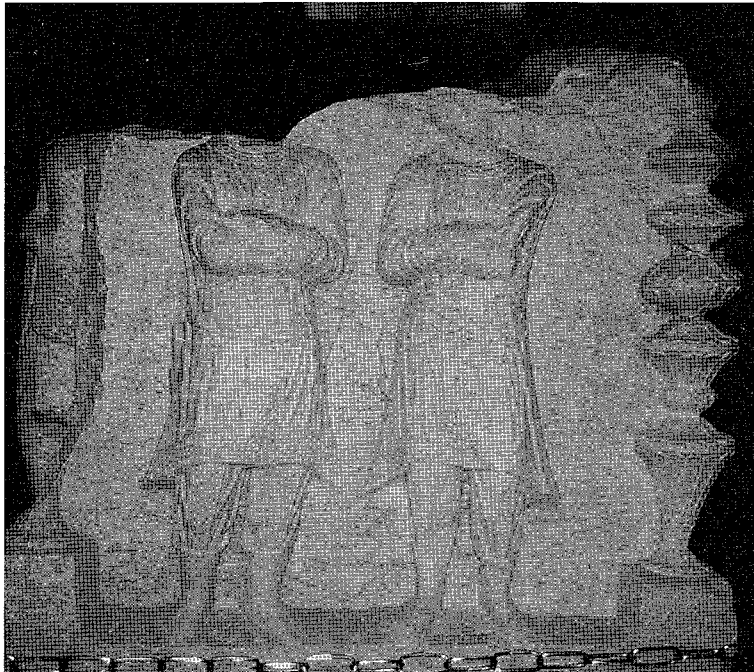


写真4 四面彫刻の石棺 腕を組む2人の男性立像（側面1）

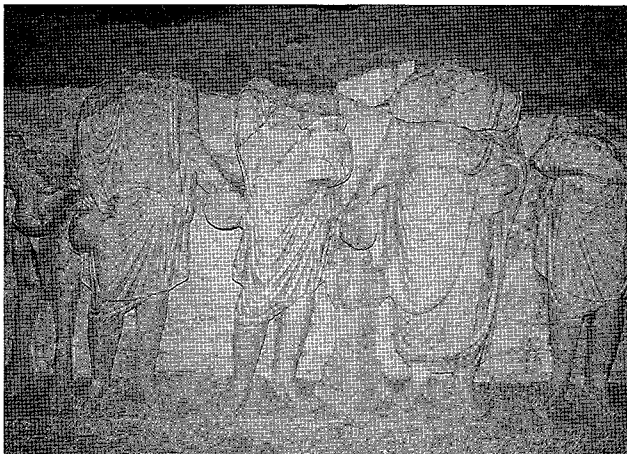


写真5 四面彫刻の石棺  
香炉台を挟む7人の立像（正面1）

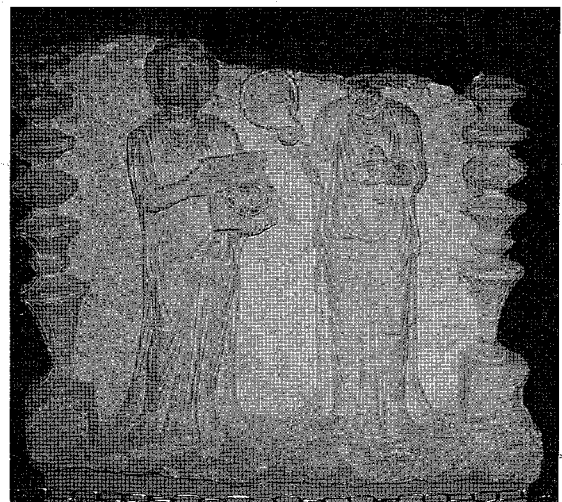


写真6 四面彫刻の石棺  
女主人と従者（側面2）

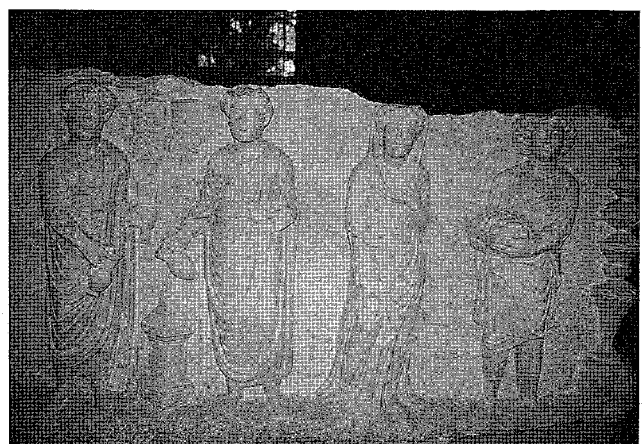
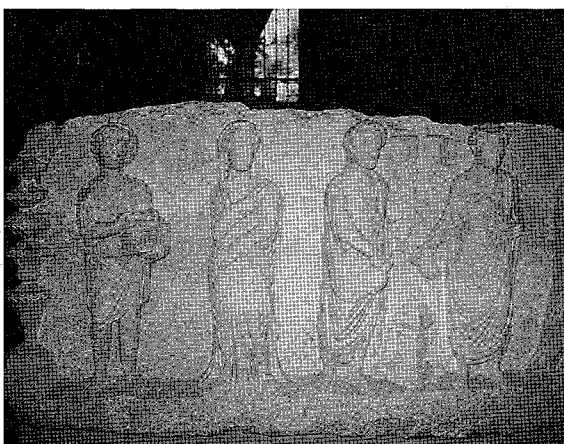


写真7, 8 四面彫刻の石棺 香炉台を挟む6人の立像（正面2）